

Title	前田富祺先生の御退官にあたって
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	語文. 75-76 P.1-P.2
Issue Date	2001-02-28
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/68970
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>



前田富祺教授近影

前田富祺先生の御退官にあたって

蜂 矢 真 郷

二〇〇一（平成一三）年三月末日を以て、前田富祺先生が大阪大学を御退官になる。

先生は、東北大学文学部を卒業され、同大学院文学研究科修士課程を修了、同博士課程を単位取得の上退学されて、宮城学院女子大学専任講師、同助教授、東北大学教養部助教授を経て、一九七七（昭和五二）年四月、大阪大学文学部に助教授として御着任になった。その後、教授に昇任されて、また、大学院重点化により大阪大学大学院文学研究科に所属されることになったが、この二四年間にわたり、文学部・大学院文学研究科において、学生の指導と御自身の研究とに尽力され、とりわけ、多くの、かつ、幅広い研究者を育成して来られた。

そして、国語学会では、先の五月まで理事・大会運営委員長を務められ、国語語彙史研究会では、現在代表幹事を務められている。とりわけ、国語語彙史研究会は、根来司（神戸大学教授・当時）・山内洋一郎（奈良教育大学教授・同）両氏とともに設立された研究会であって、会の運営などに特に力を尽くされた。他にも多くの会の委員等を務められている。

先生の御著書は、博士學位論文でもある『国語語彙史研究』（一九八五・一〇明治書院）をはじめとして、奥様紀代子氏との共著である『幼児の語彙発達の研究』（一九八三・一二武蔵野書院）・『幼児語彙の統合的発達の研究』（一九九六・五同）など、国語の語彙、特に国語語彙史に関するものが中心である。共編著等も多いが、その中に、国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』（一九八〇）（和泉書院）があり、また、前田富祺編『国語文字史の研究』（一九九二）（同）がある。現在、国語審議会において、委員として、表外漢字の字体の検討をされていることも合わせ、語彙・語彙史を中心とする研究の他に、文字・文字史の研究が加わるようになった。さらに、衣食住の語彙などの研究を基にして、極めて広い

御関心のもとに、言語文化史を構想されている。御論文等は数多く、本輯掲載の業績目録は実に一五頁に及んでいる。

甚だ私的なことで恐縮であるが、先生と私は誕生日が同じ八月二六日である。まさに御縁としか言いようがない。思い返せば、先生に初めてお目にかかったのは、第五回国語語彙史研究会（京都大学業友会館）の折であったろうか、その際は三人の研究発表者のお一人であった。その時、この研究会で会う多くの人がここに参加したことについて「前田先生からの御案内で」と言われるのを聞いて、実に広い人脈をお持ちの方だと思ったことであつた。以来、先生には何かにつけて大変お世話になってきた。そして、その中で、あの広い人脈は先生のお人柄のよさによってあるのだということ、徐々に知ることになった。そしてまた、お見受けするのは稀であつたが、筋の通らないことに対して厳しい意見をおっしゃる方であることも知つた。御研究はもとより、広い人脈も、幅広い研究者の育成も、結局は広い関心と厳しい追究のもとにあると、改めて思うこと頻りである。

その先生を、今、御停年という定めによつてお送りしなければならぬ。大学院重点化は果たされたが、独立行政法人化をめぐつて今後の展望が明確でないという現状において、大阪大学が今後どのようなようになって行くか極めて困難な局面を迎えている。そのような時期に先生のおいでにならないことは誠に不安なことであるが、願わくば今後とも御叱正を賜りつつ、それを克服して行くことが残されるものの責務であらう。今は、先生の今後の御多幸をお祈りするのみである。

本輯は、大阪大学において先生に連なる幾人かによつて、先生の御退官を記念して国語学についての特輯を編むものである。本来ならばここに執筆すべきである人はこの他に多いのであるが、種々の事情でやむをえずこれだけに限らせて貰うことになったことをお断りしておく。なお、本輯とは別に、国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』二十が、第二十二集記念ならびに前田富祺教授退官記念の集として刊行される予定である。また、大阪大学において先生の御指導を受けた人々がござつて別の論集『前田富祺先生退官記念論集日本語日本文学の研究』を企画している。合わせて御覧いただくならば幸いである。